

平成28年度第1回大村知事と語る会

- 1 日 時 平成28年9月20日（火）午後1時30分から午後3時30分まで
- 2 場 所 愛知県庁本庁舎 正庁
- 3 テーマ 芸術・文化の振興 —「芸術・アート」のあいち—
- 4 意見交換者（五十音順、敬称略）

稲波 伸行	株式会社RW 代表取締役
加藤 絢香	愛知県立芸術大学 音楽学部作曲科 4年生
小島 祐未子	編集者・ライター
斉と 公平太	現代美術作家
寺田 恭子	名古屋短期大学 教授
西川 千雅	日本舞踊西川流四世家元
堀田 勝彦	堀田商事株式会社 代表取締役

【知事】 皆さん、こんにちは。愛知県知事の大村秀章です。

「知事と語る会」ということで、年3回、テーマを変えて開催させていただいておりますが、本日はお忙しい中、お越しをいただきましてありがとうございます。

今回が平成28年度の第1回目ということでございまして、テーマを「芸術・文化の振興」とさせていただきます。ちょっとかたいタイトルになりますけど、そんなことはあまりお気になさらないで、皆様、普段活動されておられること、それから、普段思っておられることを存分に御発言いただければありがたいなと思っております。

ちなみに、これはユーストリームでリアル配信しますとともに、我々、しっかり受けとめさせていただいて、また県の文化施策に活かしていければと思っておりますので、よろしく願いいたします。

今回、第1回目を「芸術・文化」としたのは、御案内のように、8月11日から3年に1回の現代アートの国際展覧会「あいちトリエンナーレ2016」を、今回3回目でございますが、やらせていただいております。ちょうど半ばが過ぎたところですかね、10月23日までです。ということでございまして、おかげさまで今のところ、前回はちょっと上回るぐらいのお客さんに来ていただいているということでございます。

今年は、週末になると台風が来襲して大変条件が悪いかなと思っておりますが、おかげで何とか多くの皆さんにお越しをいただいております、大分定着をしてきたのかなという感じがございますが、そういった、「あいちトリエンナーレ2016」。

そして、それが終わりました、10月29日から「第31回国民文化祭・あいち2016」を開催いたします。これは、西川家元にも大変いろいろと、プロデューサーということで御支援いただいておりますありがとうございます。まさに文化の国体という、そんなイメージでございますが、10月29日から12月3日まで1か月半ぐらいにわたります、これも大いにまた盛り上げていければと思います。愛知県内54市町村全市町村で90のプログラムを用意しておりますので、これも大変盛り上がるのではないかと思います。

それから、それが終わりますと、12月の半ばに「第16回全国障害者芸術・文化祭あいち大会」、障害者の芸術祭全国大会を行わせていただきます。26年度から、「あいちアール・ブリュット展」ということで、障害者芸術の展覧会を県独自でやってきましたが、だんだん作品も増えて定着してきていますけど、今回、これは全国大会でございますので、またしっかり盛り上げていければと思いますし、12月にいろんな催しをやりますので、もう既に作品とかいろいろ募集しておりますが、大変多くの皆さんに応募とか登録をいただいております、これも盛り上がっていただけるのではないかと考えております。

ぜひ、今年8月から切れ目なく大きな大会が三つありますので、今年、愛知は「芸術・アート之年」というふうに銘打って盛り上げていければと思います。加藤さんがオペラの分野で活躍されているということですが、この間、私も芸文センターでパフォーミングアーツのオペラ「魔笛」を拝見をいたしました。大変すばらしいオペラだったかなというふうに思っております。そんなことで、また「芸術・文化」で愛知・名古屋をしっかりと盛り上げていければと思っておりますので、よろしくお願ひ申し上げたいと思います。

どうか今日は、日ごろの皆さんの活動の中から、いろいろなお考えとかアイデアとか御感想も含めて、また我々への注文も含めてお寄せいただけたらありがたいと思います。どうかあまりかたくならずに、言いたいことを言っていただければ結構でございますので、どうかよろしくお願ひを申し上げて、冒頭、私からの御挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

それでは、順番にお話をいただければと思います。
まず、西川家元からお願ひいたします。

【西川】 ありがとうございます。お話をさせていただきます西川と申します。よろしくお願いいたします。

日本舞踊という仕事をしておりますので、伝統芸能という分野によく括られます。今回のお集めいただいたメンバーからいっても、私は一応伝統係なのかなと思ひまして、その伝統の話をしたいと思ひます。

伝統文化というところがすごく大層なものに思ひますけど、どういうものかというのは、私なりの考えがございまして、これは単純に、昔ものすごいヒットしたものであると、こういうものだと思います。昔ものすごいヒットして、ヒットが続いたから今に続いていると。ですから、これは例えば、最近になって伝統に残りやすいなというのは、ビートルズなんかは残りそうな感じがしますね。ローリング・ストーンズとかはちょっとわからないです。あと、SMAPとかは解散してしまいますので、これはもうこれで終わるかもしれません。やっぱり後々の世代がずっと語り継ぎたいもの。

ところで、昔は、ビートルズなんていうのは、おかつぱヘアで出てきたんですけど、おかつぱヘアがめちゃくちゃ長髪だと。あんな、ビートルズなんか聞いた気が狂うぞと言う大人たちがいたと聞いております。昔の、ちょっと前にデビューしたときはリーゼントだったんですけど、あれもまた長髪だと、髪が長過ぎるという話だった。ああいうものは、ちょっと頭の悪いガキが聞くもんだなんて言っていたものが、21世紀の今になりますとフレンチレストランに流れていても、『ああ、いいね、ビートルズ、趣味がいいね』なんていう話になります。

ですから、何が違うかということ、時が経つにつれて新たな付加価値が増してくるということによって、伝統として文化として残ってくるんじゃないかなと思ひています。それがたまには、文化が、価値が増すからいいじゃないかという考えと、非常にそれでとっつきにくく難しくなってしまうということがあります。

私のやっている日本舞踊というのは、伝統文化だと私が生まれたときから言われていまして、けれども、ようやく最近になって伝統文化の仲間入りをしたと思ひています。なぜかという、私が子供のころは、例えばお弟子さんに、若い人は知らないですけど、山本富士子さんとか佐久間良子さんとか、それから美空ひばりさんとか、そういうスターがいたんですね。私は、東京の藤間流というところの稽古に行ったら、隣にきれいな人が座っているなと思ったら、『松坂さん』って、松坂慶子さんだったんですよ。

そういうふうに、その頃の人というのは、必ず日本舞踊をやるもんだというのがあって、

そして、もう常識的に日本舞踊というのはエンターテイメントだったんですね。例えば、今でいうとヒップホップダンスみたいなものですね。ジャズダンスは少しずつ今伝統化していますので、やる人が減っています。

「名古屋をどり」という公演を私どもは70年ぐらいやっておりますけど、これは昭和20年からやっています、本当に日本舞踊を大衆化しようということを目指してやっておりますので、これまでは新しい日本舞踊の作品を作ろうということをやってきました。なので、過去は、例えば三島由紀夫さんであったり、あるいは川端康成さんであったり、今だと教科書に、もうちょっと載らなくなってきたんですけども、載っているような人たちが現在作家だったんですね。当時の売れっ子だったわけです。それで新しい作品を書いてもらって、作品を作ったほうがいいよと、そういうふうにアドバイスをした人がいまして、その人が大倉喜七郎さんというホテルオークラを作った人ですね。ただ、藤原歌劇団を育てたりとか、数多くの芸術を輩出したパトロンというのが当時はいました。そのアドバイスにのっとって、新しい作品を作ってきたと、これをうちのじいさんと父親はやってきたわけです。

私の代に2年前にかわりましてから、私が常々感じていたことがありまして、そもそも日本舞踊は何なのかということがわかる人がどんどんどん年々減っていくと。日本舞踊と歌舞伎の違いは何ですかというところもあれば、新聞記者の人は、『歌舞伎って見たことありますか?』と言うと、『わからない』とか、『能って見たことありますか?』と言うと、『わからない』と。いや、『能って、ほら、お面みたいなのをかぶって松の絵の前でおおーっとゆっくり動くやつ』と言っても、は一っという顔をされたりとか、なかなかわからないことが多いわけです。

そうしますと、私もだんだんだんだんいろいろなイベントで踊りを頼まれるんですが、前は祝舞（しゅくぶ）というお祝いの踊りを踊ってくださいとか、そういうことが多かったんですが、最近では、獅子をやってください、と。獅子ってあれですね、髪の毛の長いやつをぐるぐる振り回すやつなんですけど、これをよくやってくださいと言われてまして、海外なんかへ行くときはよくやっていたんですけど、最近よく頼まれると。いやー、何かありますよね、あの毛が長くて振り回すやつ、あれがいいですよ、と言われて、あれ、獅子ですか?、ぜひやってください、と。つまり、髪の毛が長くてぐるぐる振り回すというシンボルですね。一つのそういった象徴があると、このイベントは大変、例えば格調が高くなるであるとか、例えば歴史を感じるということであり、そういうことを求められるよう

になりました。

なので、私になってからの「名古屋をどり」という公演は、新しいものは作らずに、あえて古典作品というものを置き、そのかわり、現代の人にわかりやすいようにイヤホンガイドというのをついたり、また、ロビーに入ったときから非日常を感じるように、いろんな記念写真を撮れる場所を作って、顔出しパネルを作ったり、あるいは芸者さんとか出演者と記念写真が撮れるようにしました。

そして、“芸者さん”というのも売りにしています。というのは、芸者さんが日本舞踊を踊るといのは昔は常識だったのですが、そういうこともなかなか通じない時代になってきました。なので、芸者さんに会えますよ、というのを今売りにしたりしています。

そうなりますと、今度はどうなるかという、新しい日本舞踊を作りますというところにあまりニーズがなくなります。なので、そうすると、今度は新しいジャンルのものというのが生まれにくくなる。これは例えば、今、同じようなものが起きているのがありますね、ロックミュージックなんかそうですね。ロックの新しいロック、プログレが出た、パンクが出た、ヘビメタが出たなんて言っていたものですね。これが、あるときをもって、もう新しいロックが思いつかないと。ヒップホップこそ新しい時代のロックだなんていうことを1990年代に言っていましたけれども、今は新しいポップミュージックというジャンルが出てきて、それにみんなが追随するというもの自体がなくなりました。皆さんは、SNSやインターネットなどで好きな曲を好きなだけ聞けるようになりましたし、このLPを聞かないと、おまえ、時代に取り残されるよなんていうことは言われなくなってまいりました。そうしたときに、今、多様化の時代になりましたものですから、もう日本舞踊だろうが新しいものだろうが、常に同じように存在できる時代になりましたけれども、情報が多様化してしまったがゆえに新しいものが出にくい時代だと、そういうふうに思います。

最後に、うちの流派にある言葉を御紹介します。

「創造なくして伝承なし、伝承なくして創造なし」という言葉があります。これは、非常にそのままなんですけど、新しいものを作っていかないと古いものはなくなる、そして、古いものを見ていないと新しいものはできないよ、と。新しいものというのは、古いものの中にいろんなヒントがあるんだという言葉で、「創造なくして伝承なし、伝承なくして創造なし」ということは、とてもいい言葉で、私は父から習いまして、これは、この間、記者発表で言いましたところ、ノーベル賞を受賞された先生が、『私、これ、大事にしている言葉があるんです。「創造なくして伝承なし、伝承なくして創造なし」、西川の家元が言っ

ていたんです、と言ってニュースに出ていましたよ、西川さん』と教えられて大変驚きまして、そして、父親に言いましたら、『へえ、いい言葉だね』と言われました。『えっ、いや、それはあなたから習ったんだけど』と、『いや、言ったかな』なんて言って、全然覚えていないというふうな話でございました。かように、伝統的に残っているものというのは、はかなくもあり、曖昧であり、いいかげんなものであるということが私が申したかったということで、自分の活動の説明にかえさせていただきます。どうもありがとうございました。

【知事】 では、続いて、小島さん、お願いします。

【小島】 よろしくお願いします。

先ほども司会のほうから御紹介いただきましたとおり、私は2年前、2014年まで「びあ」という会社に勤めておりまして、御存知かどうかあれですけども、チケットを売る会社と思ってらっしゃる方、多いかと思うんですが、一応出版社でもございまして、そちらでずっと演劇を担当してまいりました。「びあ中部版」という情報誌を出していたんですけども、この媒体は在職中に休刊という憂き目に遭いまして、それと入れかわりで、ケーブル会社のスターキャットさんと共同でフリーペーパーの月刊「びあ×スターキャット」を作り始めました。(実物を掲げながら) こういったものですね。ちなみに、この号は「あいちトリエンナーレ2010」のときの特集号なんですけれども、こういった(演劇を含む舞台芸術や美術、音楽、映画の情報が掲載された、びあ中部版と変わらない感じの)雑誌を作っておりました。また、そのころは演劇担当として記事を書くかわら、ほかに編集作業を請け負う形で、実はこれ、知事は御存知かどうかわかりませんが、法人さん向けのあいちトリエンナーレ記録誌も制作しておりました。(次回ご協力いただけるよう)トリエンナーレの成果をわかりやすく見ていただくもので、こういった冊子も作ったりしてきました。

2014年に退職してからは、フリーのライター・編集者として活動しているんですけども、なぜか愛知県さんと非常に御縁があるのか、今は愛知芸術文化センターの情報誌『AAC』の編集をさせていただいたり、今年はいちトリエンナーレの公式ガイドブックを古巣の会社が作らせていただいた関係で、この中のお仕事も少しやらせていただきました。この仕事がちょっと変わった内容で、各アーティストの作品紹介をしているんですけども、私が担当した部分は、そのアーティストの見出しだけをつくるという、コピーライターのような仕事をしまして。たぶん、キャッチコピー、見出しのつけ方が、私の場合、ちょっと変わっているからだと思います。なるべく目立つ形でつけたい、できればそのアー

ティストや作品に関心を持ってもらいたいという思いから、ちょっと変わったコピーをつけていましたので…。(2010の時も、2013の時も、) トリエンナーレ事務局の方々は私の見出しに困惑していらっしやっただと思います。(なんとか受け入れてくださったので、ありがたかったですね。) そういう風に、アートとか演劇とかに興味がない方にも、どうやったら少しでも興味を持ってもらえるかを20年以上考え続けてきたつもりです。

また、フリーになってから、ただぼーっとしていてもと思って、辞めてすぐ始めたのが、(スクリーンにスライドを映して) ホームページ。「DUCK SCOOP家鴨通信」というウェブサイトを個人で作っています。ずっと演劇担当をやってきたんですけども、今は、請われる場所では何でも書かなければいけないので、映画の原稿を書きますし、もちろん、あいちトリエンナーレのレポートも掲載しています。

これは豊川出身の園子温監督ですね。園さんもこの間、トリエンナーレに足を運ばれていらしたと思うんですけども、こういった形で映画関係のお仕事なんかもやらせていただいています。40歳を過ぎてから思い切って会社を辞めてみたんですが、いろいろまだまだ学ぶことが本当に多くて、まだ挑戦することはいっぱいあるなということを感じている日々です。ただ、環境は変わったんですが、会社に勤めていたころからずっと一貫して考えていることが、アーティストのことを知ってもらう、興味を持ってもらうことは当然ですが、そのアーティストと観客をつなぐことを強く意識しています。私は常に(読者には) 観客であってほしい、鑑賞者であってほしいと思っています。それはどういうことかという「現場」に来ていただきたいという意味です。情報誌をやってきた私が言うのも何なんですけれども、ただ「この人、知っている」というように情報として知っているだけではなくて、やっぱり映画館に映画を見に行ってもらい、劇場に演劇を見に来てもらうということをしてほしいと思うんですね。観客をどうやったら現場に引っ張ってこられるかということ、ずっと考えながらやってきたつもりです。

今ちょうど、あいちトリエンナーレ開催中で、その中でまた改めて考えたりしたことなんですけれども、もしこれが芸術文化センターや名古屋市美術館だけでやっていたとしたら、ここまでお客様は増えてこなかったように思うんですね。現代アートというなかなかなじみのない、特定のファン以外にはちょっと遠い感覚のアートの分野をまちの中に引っ張り出したということがすごく効果を上げていると思うんです。作品自体が外に展示されているものもありますし、長者町のように屋内ではありますけれども、通常のアートスペース以外のところに持っていくことで、「あっ、何だろう」と興味を引かれる方がすごく増

えたと思うんです。

そういったことを見ながら、ずっとやってきた演劇に関して言いますと、演劇も劇場からもうちよつと外に引っ張り出せないかなということ最近また考えたりしています。ここからは知事をお願いなんです、トリエンナーレのラインアップとして豊橋公園などで屋外公演が開催されますよね？ 愛知県内では今、なかなか野外劇とかテント芝居をやるスペースがないという問題があるんです。全国を回っているテント劇団が開催地が見つからなくて困っているという状況を個人的に耳にしたこともあり、もう少しいろんな形で愛知県がアートの場として開かれていくとより良いのかなと。条件問題などで難しい面もあると思いますが、ポスト・トリエンナーレというのか、(トリエンナーレとトリエンナーレの狭間の時期にも、多彩な演劇、舞台芸術が行われる環境を愛知県に期待します。)次の2019に向けても、いろんなアートの動きがまちの中にあればいいなと。何かそういったことも、もし県や、また市町村、自治体の皆さんに考えていただけたら……。劇団はどこも苦しい経済状態の中でやっているんで、いい形で折り合いがついて、なおかつ愛知がアートのまちというイメージをより強く打ち出せれば、それはそれでいいことなんじゃないか、素敵なことなんじゃないかと思います。最後はお願いごとになってしまいましたが、そんなことを最近考えたりしております。ありがとうございました。

【知事】 ありがとうございました。

それでは、引き続いて、堀田さん、お願いします。

【堀田】 錦二丁目で活動しております堀田商事の堀田といいます。よろしく願います。

(スクリーンにスライドを映して) 写真がないとわかりにくいと思いましたが、ばらばら漫画のように絵でいきたいと思えます。言いたいことはほとんどここに書いてあるんですけれども、錦二丁目、長者町という地区は、本当に繊維街がどんどんどんどん衰退して行って、なかなか難しいというか、どんどん空き地も増え、空きビルも増えという場所だったんですけれども、そこにトリエンナーレが来たことによって、トリエンナーレに会場した人が、錦二丁目に事務所を移転、あるいはギャラリーを開いたりとか、そういう活動の場を移すことによって、まち自体が減り行く繊維のまちというイメージから、何か新しく変わっていくまちだというイメージに変わり、そこに引きつけられた人がまちに移り住むことによって、まち自体が大きく変わっていききました。

まちを変えるというと、よくハードで物を建てると思いがちなんですけれども、一番大

事なことは、そこにいる人が変わっていくことで、錦二丁目はどんだん新しき人を迎え入れ、まちの本質は随分と変わってきたように思います。その変化をもとに、今度は逆にいろんな人がいて、いろいろおもしろくなってということで、再開発なども今企画されて、いよいよホップ・ステップ・ジャンプのジャンプのところへ行こうというところにいるのが錦二丁目です。

これが全てなんですけれども、写真を見ながら、過去からまちづくりとトリエンナーレというところを話していきたいと思います。

これは、場所ですけれども、栄と名古屋駅に挟まれた中心部、上（北）は名古屋城、下（南）は名古屋市の美術館ということで、非常に中心部のいい場所です。ただ、外側の大通り沿いは大きいビルが並んでいるんですけど、真ん中辺は繊維街が衰退したままで、中層のビルがこういう感じで並んでおる場所です。

まず、2000年からいよいよ繊維業だけのまちというのでは、まち自体が厳しくなるんじゃないかということで、まち自らいろんな努力をしていく時期が始まります。戦後の焼け野原から繊維街として復興していきます。昭和30年代後半には、日本3大繊維街と言われるほどまで発展していくわけです。

ところが、これが、2016年の3月時点の繊維業の分布なんですけれども、1個の四角形が100メートル掛ける100メートルです。繊維業が、実は繊維のまちといまだに言われていますけれども、実は全面積の10分の1以下が繊維になっております。

このままではもうまちが完全に滅びるということで、2000年から、年は60、70の人から若い人は14歳まで含めて、1キロのシャッターをペインティングするというイベントをまず行いました。そのうちに、繊維街というのは一般の人に来てもらっても、まちとしても意味がない場所だったんですけれども、初めてお祭りをやって、いかにも手づくりで、今見ると恥ずかしいんですけれども、本当にまちの人が手づくりでお祭りを始めました。1回目で、2日間で6万人の人を集めるということで成功していきます。そして、今では「長者町ゑびす祭り」という名前に変えまして、知事ももう何回も何回も足を運んでもらっていますけれども、このお祭りが今年16回目を迎えております。今では2日間で10万人ぐらいの来客数を迎えております。

そして、そのうちに、これも実は愛知県のほうからコミュニティービジネスということで表彰を受けたんですけれども、空いているビルをまちのいろんな人たちが会社を作って、そこにいろんな人を集めて、まちを活性化しようという、「ゑびすビル」という事業が始ま

ります。これが2002年から始まって、3棟のビルが建ち上がっています。その後、これは改装前と改装後なんですけど、入る人によってこれだけ変わるという例だと思います。

そして、その後、これは名古屋市のほうから、1階には居酒屋が入ったけど、上が全然入っていないよねということで、名古屋市と協働して伏見・長者町ベンチャータウン構想という、ベンチャー企業をこの地区に集めようという構想が始まりました。これがビルですけれども、「I. D. L a b」というビルの名前で、3棟稼働していきます。そして、2011年には、まちの将来は自分たちで決めていこうということで、3年かけて、まちのマスタープランを冊子として発行していきます。後には、まちの人が集まったり、外部からもし来たときに、例えば海外から視察が来たりすると、そういう人が集まったり話したりする場所を作ろうということで、「まちの会所」というのをオープンします。

実は、こんなことをいろいろやりながら、十何年間やってきたために、名古屋市の中では結構、あの場所、頑張っているよねというイメージが定着しました。そしてこの流れの途中でいよいよトリエンナーレというのが来ます。トリエンナーレをやるときに、実はキュレーター、今でも一番メインのキュレーター、拝戸さんという方がいるんですけれども、彼が、アートというのは、まちは変えないかもしれないよと。ただ、何か魅力を足すことができると思うということを言っていました。ここからがトリエンナーレのスタートなんですけど、先ほど長者町というか、まちなか展開という話が出ましたけれども、右側（東）が県芸ですね、下（南）が市美なんですけれども、ここの真ん中のところに何か会場を作ろうということで、まちなか展開として長者町が選ばれたのが、トリエンナーレと長者町の出会いの一番始まりです。こういう古いビルが、まちの人は、こんなのをどう使うんだと思ったんですけれども、これがアーティストやキュレーターによると、これこそが魅力だということで、いきなりこういう古いビルが残っている、今にも衰えつつある長者町が脚光を浴びたのがトリエンナーレです。こういう古いビル、先ほどの2階のビルは左なんですけれども、こういったすばらしい空間に変わっていきます。

実は、右側の絵、これは「プレイス・オブ・リバーズ」という題名のナウイン・ラワンチャイクンという作家の方なんですけれども、これが日本語では「新生の地」という題名でして、まさにこの場所、この前の場所から長者町のトリエンナーレが始まっていきます。これはお祭りのシーンとかありますけど、こんな感じで2010年、2013年にも、まちの外側にも、今はちょっと少ないですけども、こういった作品が展示されていきます。

これは地下街ですね。最近よくテレビでも出ますけれども、地下街も2013年のトリエン

ナーレで大きく形を変えました。地下に入ると現代アートが飾られているんですけども、この変化によって、もうどうしようもなかった地下街も今、ちょうど2日ぐらい前ですかね、新聞にも載っていましたが、立ち飲み街としていろんな飲食店が建ち並んで、人が多く集まるようになってきています。

これは今年ですね。私も、これは堀田商事で私の会社ですけども、会社の大部分を今トリエンナーレで提供していますので、今すごくにぎわった状態になっています。

実は、このトリエンナーレというのは、特徴的なのが、愛知県の職員と、それからキュレーター、アーティスト、それからまちの人が一緒になって推進チームを作っています。

愛知県だけでは規制が多い、地元だけでは外部に対する信用力が弱い、という難しいところをチームだからこそできるということで、そういったチームを2009年に作ったんですけども、2009年からずっとこのチームでやることによって、ほかの地区にはない独特な活動ができています。まちの人がトリエンナーレを受け入れるかどうかということも、まちの人とキュレーター、アーティスト、それから愛知県の職員とみんなで説得しに行くということを今でも繰り返し行っております。

これは、愛知県とまちが共同でアートラボという事業を、ビルを1棟借り切って、アートの展示をするということをやってきました。

トリエンナーレは、本当にまちの人に自分たちの魅力を気づかせて、しかも、今では日本全体、あるいは世界に長者町という名前が非常にいろんなところで聞かれるようになったというふうに聞きました。“長者”というのと“忍者”というのが発音が似ていて、どうも世界の人でも“長者”は発音しやすいということがすごく影響しているようです。

トリエンナーレがもたらした変化というのが、先ほどちょっと言いましたけれども、トリエンナーレによってまちの中に長者町アートビエンナーレという、アートを発展させようという、そういうグループが立ち上がってきます。さらに、「プラットフォーム」というアートを発表する場所を作ってみたり、あるいは長者町にかかわるアーティストを無料で泊めるような、そういうレジデンスができてきました。さらには、これはトリエンナーレ2010のときのボランティアの人たちが、自分たちもアートを発表していきたいということでできたグループなんですけれども、長者町アート発展計画というグループがまちなかで新しく活動し始めたり、それから、今日ちょうど稲波さんがおられますけれども、(株)RWが入っている) トランジットビル、これも2010のトリエンナーレでこの場所に興味を持った人がビル1棟を貸し切って、ここでアート活動をしようということのできたビルでございます。

そして、そこに集まった人たちがトリエンナーレと共催して、今でも大縁会・アートジャンボリーというイベントをトリエンナーレと同時並行で行うような状態になってきました。

2010のアーティストが、2013のときにはまちの人と一緒にこういった場所を作って、トリエンナーレを盛り上げたりもしています。

これも新しくまちに入った人と愛知県と昔からいたまちの人が“長者町コイン”というのを作って、さらに世界中に名前を広げようというような活動もしております。

これはもうすぐ行われる、今年は10月の22、23、トリエンナーレの最終日ですけども、その日は長者町でまたゑびす祭りが行われます。これが普通のゑびす祭りで、長者町の山車、2010でできた山車が真ん中で走っていますけれども、2013ではマーロン・グリフィスが「太陽の行進」という行進を行って、またその場を盛り上げていました。なので、今年もまた、ゑびす祭りが近々ありますので、そういうときに足を運んでいただけると、まちとトリエンナーレ、アートがどんなふうと一緒に歩んでいるかが見えると思います。

ということで、どんどん伸びていく長者町に御期待くださいということで、終わらせてもらいます。ありがとうございます。

【知事】 ありがとうございます。また引き続きよろしく願いいたします。

それでは、続きまして、寺田さん、よろしく願いいたします。

【寺田】 皆さん、こんにちは。寺田恭子と申します。発表させていただきます。

皆さん、車いすダンスというのを御存知の方はとても少ないと思うんですけども、これ、1950年代にイギリスで自然発生的に生まれたもので、1970年代からはコンペティティブなもの、競技としてヨーロッパを中心に広がりまして、現在、日本でもたくさんの方が楽しんでいるものなんですけれども、リハビリテーション、レクリエーション、そして競技、又は最近ではヒップホップとか、いろいろなところで車いすダンス、さまざまな人が楽しんでいます。

今日は、車いすダンスそのものも皆さんあまり御存知ないと思いますし、少し説明を加えながら、障害がある人たちの身体表現とその可能性についてお話をしたいと思います。

(スクリーンにスライドを映して) まず、障害のある方々の残存機能を最大限に生かすということで、これは全ての障害のある人たちのスポーツにも通じることなんですけれども、車いすならではの動きのおもしろさとか奥深さ、こういったものをダンスから発見することができます。例えば、車いす同士で2人で踊る。そうすると、シンクロの動きというのが、もちろん健常者のダンスの中にもこういった形はありますけれども、車いすなら

ではの形であるとか、また、立って踊る人と座って踊る人、この2人のパワーの使い方、あるいはコネクション、そういったところから、1人で車いすで動くだけでは表現できない、そういったものが生まれてきたりします。

今日は、ちょっとこういった事例を出してまいりますけれども、ここのお写真の方、障害が大変重い女性なんですけれども、一見、表現活動・ダンスなどに無関係、あるいは、こういう人が何かできるのかな、って思われる方も、世間一般ではいらっしゃるかもしれませんが、車いすダンスに出会ってこの彼女が3年後に、これ、私と一緒に踊っているところなんですけれども、首の支えも取れて、しっかりとホールドと言ってですね、社交ダンスはこうやってホールドを組むんですけれども、それと同じような形で組んで踊りを踊るようになることができました。

もう1回彼女の写真を出しますが、先ほどの彼女は、右手で電動車いすを動かすジョイスティックというものを操作していたんですね。これは、操作できるから右手で使っていたわけで、右手を表現に使わないのはもったいないんじゃないかということで、右足がわずかに動きましたので、足にジョイスティックをつけるように、そういった工夫をして、足操作をして使える右手を表現に最大限に生かすということで、このような形で右足で電動車いすを操作して、使える右手を表現に使うという、こういうようなところで彼女の身体というのが車いすダンスを通して変わっていった、変化していった。これは、表現を何かしていく中で、今あるものプラス、今まで想像もつかなかった、そういった可能性が彼女の中であって、それがまた開花されたということでもあるんですね。

車いすダンスは、このような新しい発見がたくさんあります。今のその方よりももっともっと重い方も、現在、車いすダンスを楽しんでいます。こちらの方は、普通に座る姿勢をとれない方ですね。こういった方も、いわゆるスタンディング・パートナー、立って踊る方と一緒にダンスを踊ることができます。この下の方もそうなんですけれども、工夫次第でいろいろな表現方法ができるんですね。

私、1993年に横浜で車いすダンスに出会いまして、95年から車いすダンス名古屋ビバーチェや、それから、もう一つ、トライアングルといって障害の重い方々とその家族と一緒に集うダンスをいろいろやっているんですけれども、私たちは、表現者がただ皆さんに見ていただくだけではなくて、参加型のプログラムを劇場でも多く取り入れています。これは名古屋市の千種文化小劇場ですが、オーディエンスも舞台上上がってもらって、その場、そのときを一緒に楽しむという、こういったような活動もしております。また、こういっ

た布とかいろいろなものを使って楽しんでおります。

いろんなことをやっているんですけども、文化、芸術、こういった振興という立場から私が考えていることは、一つは、多様なジャンルの表現者とか実践者がお互いに学び合っていて、深まって、そこから一緒に何かを作り出していく、そういった大きなエネルギーというのが、違うものが一緒に寄り添っていくのが、寄り添って作っていくのがいいんじゃないかなというふうに思っております。

また、もう一つは、障害者芸術への理解、それから、その促進という立場から考えますと、まずはいろいろな美しさがある。その美しさを感じる心を育てる教育がやはり大事なのではないかなというふうに思っています。

それから、もう一つは、私、今、研究のほうで重度の障害のある方たちにいろいろ接しているんですけども、障害の重い方たちが何か作品の重要な仕掛け人として芸術活動に参加できるような取り組み、仕組み、そういったものを考えていきたいなというふうに思っています。なぜかという、障害の重い方たちは、その存在が命と深くかかわっているんですね。命ってものすごいエネルギーがあると思うんです。そのものすごいエネルギーをその体自体で、その人がそこにいてだけで持っている、その強さをほかの方たちにつなげていって、何か大きなものを作っていくという、こういったことが私の目指すところでもあります。愛知でぜひ発信していきたいなと思っています。

以上です。ありがとうございました。

【知事】 ありがとうございます。素晴らしい活動でございます。ありがとうございます。確かに障害の重い方、重度の方は大変ですよ、やっぱりなかなかね。でも、やっぱり可能性が広がっていくというのは素晴らしいことだと思います。よろしく願いいたします。

それでは、続いて、斉と公平太さん、お願いいたします。

【斉と】 斉とです。よろしくお願いいたします。

私は、現代美術という肩書で活動しておりまして、その立場からお話しさせていただきます。

今回のテーマである芸術や文化というものの意味は、いろいろ多様性があって、いろいろ広範囲に及ぶものだと思いますけど、それで、その中に美術教育とか、そういうものも含まれると思います。それで、その中で、僕は、今回、お話のある文化というのは歴史の積み重ねによって形成されるものだというふうに思っています、過去に立ち返ったり、

検証したりすることによって、また新しいものが生み出されるというふうに思っています。

その中で、愛知県の現代美術の歴史のアーカイブ化ということを一応今回お話しさせていただきます。

この話は、僕は現代美術をやっているのでも、現代美術の話になるんですけど、他のジャンルにも一応通ずる話だと思っています。

あくまでも一つの例なんですけど、ICA, Nagoya というギャラリーが昔、名古屋にありました。非常に国内レベルで見ても重要なギャラリーでして、80年代から90年代初頭に名古屋にあったギャラリーなんですけど、それを昨日、「ICA, Nagoya」とインターネットで検索したんですけど、何にも出てこないんですよ。

要は、作家のプロフィールに、そこで展覧会をやったとか、今有名になった学芸員がそこに勤めていましたという情報は出てくるんですけど、肝心のICA, Nagoya というものの情報は全く出てこないんですよ。

それで、それが重要じゃないかというところじゃなくて、前回のトリエンナーレでも、「ICA, Nagoya と名古屋の現代アート」というシンポジウムまで開かれているんですね。だから、そのことを、そのギャラリーが重要だということについては、みんなわかっているんだけど、その情報というのはインターネット上には上がっていないという。それは、実際は本とかそういうものを見れば、そういうことに関して書かれた記述はあるんですけど、とりあえずネット上にはないということなんです。

それで、これは2013年8月の『REAR』という名古屋で発行されている批評誌なんですけど、これでは、名古屋の画廊史とか、そういう特集も組まれたりして、そういうものを見れば、ICA, Nagoya とか、そういうことについても記述があるわけなんですけど、ちょっと断っておきたいんですけど、美術の分野の中でギャラリーのウェイトが高いということが言いたいわけじゃなくて、愛知県の美術の歴史の中にある情報というものが意外と、個々はいろいろ検証はされているんですけど、それを統括して見える場所というのがないんですよ。

そうやってシンポジウムが開かれたりとかされているんですけど、それを統括するような考え方とか、そういうものが何かできないのかなというふうに今考えていまして、ちょっと単純なんですけど、インターネットを活用する中で、リンクを単純に張ったりとかするとか、さっきのICA, Nagoya に関していうと書籍しかないもので、だから、こういう書籍を見ると、そういうことの情報が載っていますということを集約するだけでも

大分違って来るんですけど、それで僕が今イメージしているのは、本当はそれを美術館の学芸員とかがやればいいんですけど、そういう部署があればいいんだけど、そこまでいうとまたお金の話になってくるので、今既にある情報というのはわりとあるわけなんですよ。それを連結して、足りない部分は補完して、さらに総合的に検証していくということをするれば、愛知県の美術の歴史というものをコストを下げた総括することができるんですね。

ただ、問題は、インターネットが普及する以前と戦後から90年代初頭ぐらいの美術の流れというもののアーカイブが作れないのかな、というふうに僕は今考えています。

これ、現代美術だけじゃないんですけど、例えば音楽でも、CDとかそういう媒体ができた以降のものに関しては遡って調べたりできるんですけど、音源の発明以前の、例えば古い日本の民謡とか、そういうものは現地に行って伝承されているものを調べたりとか、そういうことをやっている方もいるんですけど、それは媒体になりにくいものということで、それで、媒体に記録されていないもの、というものの中に愛知県の文化というものも含まれているんですね。

だから、どうしても、今はちょっと状況が変わってきて、地方に注目がいつているんですけど、90年代前から、戦後からその間というのは東京中心の、メディアがそこに集中しているからということなんですけど、そうじゃなくて、だからこそ愛知県の文化の、現代美術でいうと戦後から90年代初頭の歴史の検証をする何かシステムがあれば、東京中心じゃない本当の日本全体の文化というもののあり方が見えてくるんじゃないかな、というふうにちょっと考えています。

それが行政がやるのか、民間がやったりするのか、市民が協働してやっていくのかというのはちょっとわからないんですけど、そういうことができたら、愛知県の文化、愛知県の現代美術は本当にすごくて、世界的に活躍されている方もいますので、そういうのを本当に一つのコンセプトを持って世界に発信していけるんじゃないかなと思います。

特に、何でこんなことを、美術のアーカイブが重要かということをお願いしますと、美術館は美術作品自体をずっとコレクションしているんですよ。それをジャッジするジャッジの価値基準というのは多分、今後ずっと10年、50年、100年とたつたときに、コレクションする価値基準というのは変わってくるはずなんですよ。そのときに、今の価値基準でコレクションされていないものがなくなって困っちゃうんですよ。

だから、その場合に、アーカイブがあったときに遡って、このときはこういうものがありましたよ、ということがないと、次の新しい文化を作り出すということができなくなっ

てしまうので、それを何か形のないコレクションというか、そういうことができないかな
ということに僕は今考えています。

以上です。ありがとうございました。

【知事】 ありがとうございます。また後ほど御意見をいただければと思っております。

それでは、引き続きまして、加藤絢香さん、お願いいたします。

【加藤】 愛知県立芸術大学4年、加藤絢香と申します。本日は、このような機会をいただき大変うれしく思います。よろしくお願いいたします。

私は、今まで学生が企画、制作、出演する大学のオペラサークル、オペラ工房で活動してきました。今日この場で話すにはすごく小さな話になってしまいましたが、学生の目線で活動を通して感じていることをお伝えできればと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

まず、オペラサークル、オペラ工房は、美術学部と音楽学部の学生有志が集まり、毎年、秋の大学芸術祭で「芸祭オペラ」と題した公演を行っています。芸祭オペラは40年の歴史があるんですが、大学の所在地である長久手市の方のお話を聞いたときに、あまり知られていないということを実感しました。そこで、少しでも多くの方に私たちの活動を知ってほしい、オペラに親しんでほしいと思い、長久手市文化の家というホールで初の学外公演を企画し、私は実行委員長を務めました。

オペラ「フィガロの結婚」をやったんですけれども、初めて見る方でもわかりやすいように日本語上演で、さらに時代を江戸にして時代背景をわかりやすくしました。さらに多くの地元の方が来られるように、長久手市全域の回覧版にチラシを挟んだり、小中学校にチラシを配ったり、あとは地元のカフェやデイサービス施設などでコンサートをするなど、長久手市民に向けた広報活動を行いました。

(スクリーンにスライドを映して) こちらが一部写真になるんですけれども、新聞で取り扱っていただいたり、右上は、ケーブルテレビに出演させていただいたものです。左下は、デイサービス施設でコンサートをしていて、右下は、長久手市の春のお祭りで出演させていただいたときのものです。

今年の4月に公演があったんですけれども、こちらが公演の様子になります。公演当日は約960の方にお越しいただき、アンケートでは、初めてオペラを見た、もう一度見たいなど、多くの長久手市民の声を聞くことができました。これほどうれしいことはなく、私も

本当に幸せな時間が過ごせたと思っております。これらは全て学生が主体となって作り、約1年間、稽古と会議と制作に奮闘してきました。

あと、さっきの広報活動では、ほかにもラジオや広報紙にも載せていただいたんですけども、それらはほとんど長久手市役所の方にいろいろ情報をいただき、協力していただきました。

初めての学外公演に、学業と両立しながら作り上げるのにはたくさんの苦労があり、特に資金集めでは、寄附やクラウドファンディングといったインターネットサービスを利用するなど、たくさんの取組をしました。

オペラは、長期間の稽古に演出家、歌唱指導、指揮者などの人件費、舞台美術、衣装など、今回はかつらとかも使っているんですけど、すごく予算が膨らみます。助成金を申請しようと思ったんですけども、学校サークルは申請対象外のところが多く、なかなか申請することも難しかったです。また、学生主体の団体となると助成金を獲得することも難しいかと思えます。

しかし、学生にとってうれしい点もありました。私たちが利用した長久手市文化の家では、ホールの利用料金が学生割引や市民割引などがあり、さらに一般的には有料になるような備品が無料で借りることができました。このような割引があれば、学生や地元の利用が増え、地域文化振興につながるのではないかと思います。実際、私の大学では、文化の家を利用した自主企画公演がかなり多いと思います。これは、演奏や作品を発表する機会が増え、さらに市民に芸術に触れる機会を作ったり、自分たちのモチベーションを高めたり、多くの利点があるのではないかと思います。

そこで私は、学生の若いエネルギーが社会にも発信しやすいように、助成金などの補助以外にも、場所の提供やホールからのサポート、学校や施設、市民団体などが提携して訪問演奏するなどの芸術に触れる機会を増やせたらいいなと思っております。そして、公演が増えるだけでなく、そこに自主的に足を運んでくださるお客様も増えるように芸術を身近に感じさせられたらと思っております。

また、個人的な意見になりますが、私は、この公演で愛知県芸術劇場のインターンで学んだことや職員の方のサポートが大変力になりました。このように身近にある劇場と学生、あるいは劇場と学校、地域の方などがつながることができるのは、非常に大きな力を生むのではないかと思います。

以上で終わります。ありがとうございました。

【知事】 ありがとうございます。また後ほど御意見を聞かせていただきたいと思
います。

それでは、稲波伸行さん、よろしく申し上げます。

【稲波】 こんにちは。私は、株式会社RWというデザイン事務所の代表をしておりま
す。弊社は、デザインという資源を使って、地域や社会の課題を解決するというを目的
にしております。

今回、障害者芸術祭のキュレーターを拝命させていただいておまして、この際にいろ
いろ、なぜ県が、行政がこういった芸術祭にお金を使うのか、という意味を非常に深く考
えました。通常の展覧会や芸術祭をやるのであれば、別にあえて税金を使う必要がないわ
けで、じゃ、税金をどうして使うのかということ深く考えたときに、障害者芸術祭とい
うイベントの性格も鑑みまして出した結論としては、今、現状、障害者と健常者の間には
やっぱり見えないバリアがあります。皆さん、生活されていても感じられると思うんです
が、まちの中で障害者を見る機会がどれだけ多いかというと、少しずつ増えてはいますが、
まだまだそんなに多く目にすることはありません。でも、一方、病院やそういった施設に
伺うと、非常に障害者の方が世の中に多いんだという認識になる方、非常に多いと思
います。

そういった中で、じゃ、障害者と健常者の中にある、今あるそのバリアを少しでも取り
除くことができる、そのきっかけとなる、お互いが一步步み寄る、そのきっかけとなるこ
とができるのであれば、この芸術祭が税金を投入してもやる意味がある会になるんじや
ないかなということキュレーターの方たちといろいろお話をして、今回そういうコンセプ
トで進めさせていただきました。

その中で芸術の力というのは、その一歩を超える力があるんじゃないかということで、
今回のコンセプトとさせていただいているんですが、じゃ、そういった芸術を活用して健
常者もしくは障害者の方たちがどうしたら自立できる社会が作れるかということ芸術文
化振興の文脈に合わせて少し、私なりに大変僭越なんですけれども、ちょっと考えてまい
りましたので、ちょっとお話しさせていただきます。

まず現状、課題として芸術・文化振興というのを単独で考えられているくらいがあるん
じゃないかなというふうに思っております。あとは、芸術・文化教育への無理解は国を挙
げてもなかなかこれはあるんじゃないかなと思っております。現状、カリキュラムがど
んどんなくなっていったり、特に高校教育などは、美術や音楽の単元はだんだん減ってき

ているのが現状で、そういった芸術・文化を志す方たちが活躍できる場がどんどん減っているという現状があると思います。

その中で、この三つ、私はちょっと出させていたきたいなと思っていて、一つは、芸術・文化の振興ミッションの提示ですね。これまた、ちょっと後で詳しく説明させていただきます。二つ目は芸術・文化教育の強化、あとは三番目、クリエイティブと産業の効果的な連携活用、この三つをちょっと提案させていただこうと思っています。

まず、一番目に挙げました芸術・文化の振興ミッションの提示というのはどういうことかといいますと、まずは、芸術・文化の振興を、これは本意ではないと思うんですけど、芸術・文化の文脈の方たちに対しては本意ではないと思うんですけど、まず、経済につなげるということをちょっと試みてもいいんじゃないかなと思っています。

それはどういうことかといいますと、済みません、勝手に私が考えるんですけど、私が考える芸術・文化振興策の中心は教育だと思っています。クリエイティブ教育ですね。そのクリエイティブ教育はどういうことかといいますと、これは全ての能力の土台となる考え方だと思っています。

例えば、芸術は企画力、発想力、構成力、表現力、プレゼン能力、コミュニケーション能力と、人間が人間活動を営むためにベースになる能力を非常に鍛えられる教育ではあるので、このクリエイティブ教育をいかに芸術振興の柱にするかということが一つ大事なことでないかなと思っています。

じゃ、芸術・文化の教育をどういうふうに強化していくかというのを二番目にお伝えしたいんですが、芸術・文化のクリエイティブ教育を民間活用することによってやっていきたいなというふうに思っています。

これはどういうことかといいますと、幼年期に対するクリエイティブ教育というのは、先ほど申し上げた芸術や音楽を活用して、企画力や構成力などを鍛えていくベースアップにつながっていくと思うんですけども、高等化していくと専門教育になりがちですので、まずはベースのところを押さえるために、幼年期からの芸術・文化の教育を民間活用しながら徹底していきたいなと思っています。

民間活用というのは、いわゆる学校の中のカリキュラムではなくて、学校外のカリキュラムですね。絵画教室ですとか、ピアノ教室ですとか、あるいは市中には市民芸術家みたいな方がたくさんいらっしゃるんで、そういった方たちが子供の教育にかかわっていきながら、クリエイティブ教育を行っていく。そうしながら、芸術関係の勉強をした人たちが

市中に出ている中で、そういう人たちにも活躍の場を作りながら、実益として子供たちの教育もしていく、プラス、そういった教育者の方の育成もしていく、こんなことができたらいんじゃないかなと思っています。

ここからさらに専門分野を教育強化していくためには、専門分野がいかに発展、活用していくかということが非常に重要になりますので、クリエイティブ教育を土台にして教育された人たちが活躍できるクリエイティブ産業の活性化、そこもまた必要じゃないかなと思っています。特に、愛知県は非常に物づくり産業が盛んですので、モノづくり産業はクリエイティブと非常に相性がいいです。デザインをすると物が売れるようになるとか、そういった形でクリエイティブを活用した産業との連携もあわせてやっていく。

この三つで何とか芸術・文化振興を活性化していけると、障害者も健常者も自立した社会に向けて県政がうまくいくんじゃないかなという、勝手に考えて提案をしてみました。ありがとうございました。

【知事】 ありがとうございました。また障害者芸術・文化祭も何とぞよろしくお願いたします。また後ほど御意見をいただきたいと思います。

まだ時間がありますので、再度御意見等があればよろしくお願したいと思いますが、では、西川家元からまた御発言をいただければと思います。

【西川】 文化というのは、本当に広いテーマでございまして、これはスポーツとか健康とかにも置きかえられると思うものですから、常に全ての県民が活動としてやる芸術・文化の振興ということもありますし、また、今、斉とさんのお話にあったような、今までにあったものをどうやって残していくか、記録していくということもありますし、また、さらに優れたアーティストを作りやすい環境を作っていくという、こういう環境づくりみたいなこともあろうかと思うんですね。

愛知県というのは、わりとやはり武家社会というのがあったものですから、芸事、習い事、芸術、文化、一般的には他の県よりは非常に盛んなのではないかと。実際に人口としては、演劇にしましても、芸術にしましても、人口が多いのがありますけれども、かなり活動している人は多いのではないかなと思います。

なので、課題を一つ絞っていくということが、逆に言うとちょっと難しいのかなと思うんですけれども、お互いが連絡をとり合うとか、交流するというのが日本の社会というのは常に弱い、丸山眞男の『日本の思想』というのでも「タコつぼ文化」とよく言われますけれども、いろんなタコつぼの中で、そのの主がいて、お互いのタコつぼを批判し合

うみたいな文化だというふうにその本では書いてありましたが、こんなような本を薦めてくれたのは、厚労省のキャリアの方が薦めてくれましたが、わりとそういう傾向がある。西洋ですと幹に広がっていくというのがあって、ネットワークになっていくというところがあるので、そういったことをぜひ行政のほうで何かそういう場を作っていただけるとありがたいな、そういう意味では、今日のような会もお作りいただいたことを大変ありがたいと思います。

【知事】 ありがとうございます。

それでは、小島さん、いかがですか。

【小島】 今、家元からお話があったように、確かにやっている方の人口は多分、人口比率からすると多いとやっぱり言われていて、演劇関係でも劇団が人口に対してかなり多い地域と言われているんですね、愛知県は。高校演劇が盛んであったりとか、いろんな影響があると思うんですけども、ただ、これ、多分皆さんお感じだと思うんですけど、やっている人が多いわりには見る人が少ない問題があると思うんですけど…。

【西川】 ほとんどお友達が見るという。

【小島】 非常に申し上げにくいところですけど、そういう側面はあります。なので、先ほどの稲波さんのお話に関連づけて言うならば、鑑賞者教育のほうも同時にやっていけないといけません。アーティストだけを育てていても（シーンは豊かになりませんし）、アーティストを育てるのはやっぱり鑑賞者だったりするので、できれば鑑賞者教育ができるといいのかなというふうに思っています。

というのは、今年、たまたま東海三県で演劇についてお話をする講座をやらせていただいているんですけども、それは鑑賞者向けの講座なんです。演劇というのはどういうものなのか、どういうふう楽しんだらいいのか。どうしても遠い世界というのか、見たことがないとか、学校鑑賞で1回見たことがあるぐらいだわという方だと見方がわからなくて、やっぱり行くのが怖いようなんです。なかなか自分で一步を踏み出せない方々に御説明をして、見に来ていただけるように促す仕事なんですけれども、意外にやってみると反応がよくて、観劇とセットにしている講座なんかは、もともとの講座の人数より行く人が急遽増えたりしています。ロコミで「おもしろそうだから一緒に行かない？」という風に増えているんです。みなさん、ちょっとヒントがあれば見るということが怖くなくなるので、やっぱりそういったことも（観客を増やすのに有効なんだと実感しています）。だから、ネットワークの問題でもあるし、教育の問題でもあると思うんですけども、何かそうい

ったことがしていけるといいんでしょうね。

本来は、我々、情報誌がやってくるべき仕事だったとは思いますが、今さらながらそういったことを考えたりしております。ただ、長者町さんとかは、まさにそういうことをまちぐるみでなさってますよね？ 鑑賞者も集っていらっしゃるじゃないですか。そこはすごく貴重。(先日もアサヒ・アート・フェスティバルの事務局の方々が、全国的に見ても非常に価値ある活動だというふうにおっしゃっていましたね。)

【堀田】 ちょうど私の会社自体が長者町会場のインフォメーションが設置してありますので、長者町の中ではトリエンナーレの来場数が最も多い場所なんですね。そうすると、実は今までアートにはおそらく関係ないだろうなと思うようなカップルがすごく仲よく会場に入っていきののがすごく特徴的でして、しかも、堀田商事といううちの会社は、4階に大木さんという方が展示しているんですけど、大木さんという方が、東大出身の映画監督もやっている方なんですけど、多分入った瞬間に、これ、どう見ればアートなんだろうというすごく不思議な作品がいきなり4階にあるんですね。それに1階は「ルル学校」というインドネシアのアーティストがそこで学校をやっているというスペースなんですよ。

だから、そういう意味では、今まで名古屋って、よく名古屋飛ばしと言われるように、特に美術とかそういうものの展示会ってどんどん飛ばされていって、なかなか世界的なものというのはなかったころに、現代アート、特殊分野ではあるかもしれないんですけども、それはあいちトリエンナーレによって見れる機会がこれで3回あるということで、結構間口を広げているような気はするんですね。

あと、さっき西川さんから、交流が苦手という話が出ていたのがすごく、ああ、そうかなと思うことがあって、実は僕は、錦二丁目でまちづくりをずっと十何年やっていますので、いろんな人と会う、特に地元で会うことが多いんですけども、まちづくりって結構誰でも参加できそうに見えるんですけど、実は反対者って結構いるんですね。

こっちの方向は好きじゃないとか、これはどうだというので、結局喧嘩したくないので、適当に距離感を置いている人というのは結構多くて、それがアートになるとそういう障壁がなくなる場合が多くて、例えば、先ほど「新生の地」という「プレース・オブ・リバーズ」という絵を出しましたが、そこにまちづくりは一切かかわらないという、今96歳のおじいさんの絵が描いてあるんですね。そのおじいさんは散歩コースに必ずそこを組み合わせるんですよ、自分の絵がありますから。これだけでも、その人が反対したために、その家族が全部まちづくりに反対だったのが、今、錦二丁目のほとんどトップ級に大事なまち

づくりの人は、その人の息子さんだったりするんですね。

だから、アートというのはいろんな障壁を崩すという効果があるので、いろんな意味での交流をひよっとしたらアートというのは作っていけるのかなというのが1個思ったのと、あと、ネットワークという話もありましたけど、先ほどあいちトリエンナーレボランティアがグループを作って、アートのまちなかアート発展計画というグループをつ作ったりしているんですけど、なぜかアートに関しての分野だけは愛知県でもネットワーク化が僕は進んでいるような気がしていて、先日、名古屋市が魅力のないまちランキングでひどいことになっていましたけど、どうしても経済、経済で走りがちで、特に名古屋駅を代表とする、そういうところに比べてちょっと違う部分を伸ばすことによって逆に、商売の魅力じゃないんだけど、もっと本質的な、あるいは違う意味での魅力を足すことで名古屋とか愛知県というのが、僕は、お金がないと前へ進めないのは重々承知しているので、知事が進められているような産業でしっかり稼ぎながらも、やっぱり文化的なことをうまくやっていくことによって全体的な魅力を上げると、長者町なんてもともと商売ばかりでしたけど、商売が廃れていく中を実はアートによってもう一回イメージが変わって、そこに集う人が変わってというふうに、結局また経済、また発展に向かうということが起きていますので、何かうまい方法があるんじゃないかなとは今日思いました。

【知事】 ありがとうございます。なかなか長者町も、これで3回目ですからね。大分定着をしてきてあれだと思いますけど、ぜひまた一つでも二つでもいろんな新しい芽を作っていたらありがたいなというふうに思います。

それと、小島さんがさっき言われた、いろんな芸術活動とかされる方は多いと思うんですけど、確かに見に来られる方は少ないということですかね。

【小島】 と言われていますね。

【知事】 言われていますね。それは私も聞きますね。実証できるデータがあるわけじゃないですけどね。

【小島】 そうなんです。なので、何となく自分がそういう現場に行くときの肌感覚でもありますけど、これ、家元の前であれですが、例えば、お弟子さんがほかの舞踊公演、ほかの、例えば、コンテンポラリー・ダンスとかを御覧になっているという実感って…。

【西川】 ないですね。

【小島】 ですよ。でも、本当に何かを表現するためには、やっぱり他を知らなければ独自のもの、本当の個性なんていうのはわからないわけで…。やっているだけではだめ

なんですよね。見て、それこそさっきの…。

【西川】 他ジャンルを楽しむという傾向はあまりないですね、どの分野でもね。

【小島】 それこそ伝統も知らなければいけないし、同じ現代を生きる表現者たちのことも知らなければいけない。でも、なかなかその感覚がないのが私たちとしてはちょっと残念なところではあります。

【知事】 またいろいろそういうのは考えていきたいなというふうに思いますけど。それでは、寺田さん、いかがでございましょうか。

【寺田】 今いろいろお話を聞かせていただいて、堀田さんがアートは障壁を崩すというか、障害のある方って本当にまちなあまり出てきませんけれども、今現在、でも、やっぱりたくさんいるんですね。特に障害の重い方たちは、なおさらまちな出ていけないような状況で、高齢者も今とても増えてきていますし、いろいろなところでもっと芸術・文化に触れて、人間らしく豊かに生きるということを求めている人たちが、目に見えないところにたくさんいるんだという。だから、そのあたりを何か私たちは切り口をもって、こんなふう楽しんでいるよというのを活動していきながらアピールしているわけなんですけれども。

今、私がやっている活動の中で感じることは、体は動きたがっているという、すごく何て言ったらいいかわからないんですけど、どんなに障害が重くて、例えば目だけしか動かなくて、それでしか意思表示ができなくても、ダンスを提供して一緒にやったときにすごく高揚感を持てたり、後で楽しかった、よかったという反応があるんですね。

全ての生あるものが、やっぱり主体的に何かやりたいというエネルギーを持っているというものをとても感じるものですから、だから、そういったアートも、まちな出てこれない人たちにも何か、自分たちも芸術とかそういう文化、また自分たちの時代が築き上げてきたもの、あるいは過去のものに触れていって、それを楽しめる、そういうようなものも考えていくというのはどうかなというふうに思ったりもします。

また、先ほど教育という言葉もキーワードで稲波さんのほうからも皆さんへ出していたんですけど、やはりいろんなものに触れて、体験して、そこで感覚として体の中にすり込んでいくというのはとても大事だと思います。小島さんも、まず情報として与える側だけれども、その現場に来てほしいんだよねということをおっしゃっていらっしやっただと思いますけれども、現場でいろいろな人たちのエネルギーを感じる、それがやはり自分たちがもしその中で、子どもたちが何か発信しようと思ったときに、いろいろなこと

を体験することが何か新しいものを生み出す力になっていくんじゃないかというふうに感じて、いろいろ思うんですけども、芸術というものが人々の垣根、心と、あと体、いろんなものを超えて、それから、今見えるものだけじゃなくて、見えにくいもの、そのあたりにも何かアプローチできるような活動ができるといいなと思いました。ありがとうございます。

【知事】 ありがとうございます。

それでは、斉とさん、いかがでございましょうか。

【斉と】 今回、みんなの話を聞かせていただいて、車いすダンスとかいうのも全然、今日の今日まで知らなくて、見せてもらったらすごく、来る前は資料で見て、どういうものなんだろうと思って、見せてもらって、すごく興味を持って、おもしろいな、おもしろそうだなという気持ちになったんですよね。見たいなと思うし、想像しているものと大分違ったなとか。

それは知らなかったからなんですよね、そういうのがあるということ。それを知ったら見たいと思うきっかけというのをどうやって作ったらいいのかなということは今考えたりしますが、そういう情報発信する方法ということが重要になってくるかなという、それぞれやっていることはいろいろすばらしいので、それをどういうふうに伝える方法というのが、それも重要なことかなという。

僕は作家なので、あまり作品のことしか考えていないんですけど、本当は作品自体にもそういうものは、例えば見るとか、教育するということが内包されていないとだめかなという。お金をかければいろいろできるんですけど、物の見方とか、考え方が変わるということが、そういう考え方が伝わるというか、ウイルスみたいに思考の方法というのが伝わるようなものを作らないといけないし、作家自身もそれを見る人に伝えていかないと。どうせわからないだろうとか、僕はずっと活動していて、結構、僕は別にわからなくてもいいやという立場なんですよ、本当に悪いけど、僕は、僕個人は。ただ、別の場所、こういう場所でやるときは絶対伝えなければいけないということはいつも考えていて、いろいろやっていくプランとかプロジェクトに関しては、必ず相手に伝えなければならないという気持ちでやっているんですが。

結構、キャラクターをやったおかげで、行政の人とか、全く美術と関係ない人と話す機会が多かったんですけど、そのときに思ったのが、あっ、こっちが大分悪いなというふうに思うことが多くなりましたね。こっちが物の見方が狭いんだというふうに逆に考えるこ

とが多くなって、それがまずいなど。おごりじゃないんだけど、作品を作っていて、それを捨て去っていくことのほうがより作品としていいものができるんじゃないかなというの、そういうことを考えたりもしました。

ちょっと何の話がわからなくなって、そういう感じで、いろんなものに触れてよかったです。ありがとうございます。

【知事】 ありがとうございます。

それでは、加藤さん、いかがですか。

【加藤】 先ほど、アートを発信するほうはいても、それを見に行く人が少ないというお話が出ていましたが、私も無意識にアートが自分の生活の中にないと見に行こうというきっかけもないと思っていて、先ほど稲波さんおっしゃっていた幼少期からの芸術・文化の教育で、それを学校機関ではなく、習い事などでやるということをおっしゃっていましたが、学校では今、美術、音楽の授業も少なくなっていますし、なかなか学校教育で芸術を親しむということは難しいと思います。なので、こういった学校の外で幼少期からアートに触れることができるのは、自分が大人になってから自分の足で見に行こうとすることにつながるのではないかなと思います。

あと、先ほど堀田さんが、関係なさそうなカップルが見に来ていてという話をされていましたが、今回のトリエンナーレでは、岡崎の公園にアートの作品があって、参加型で子供も楽しむことができたりというものがあまして、そういつて無意識に生活の中にアートがあるというのは、子供も無意識で触れることができ、すごくいいのではないかなと思います。

知事がオペラの「魔笛」を見に行かれたとおっしゃっていましたが、今回の「魔笛」はオペラにダンスの要素が強く加わっていて、そうすることで、お客さんの中にも、オペラファン以外にダンスのファンや、あとは衣装もすばらしかったので被服関係の方とか、いろんな分野の方がお客さんとして訪れて、それをきっかけにまたオペラを知ってくださる方が増えるというのはすごくうれしいなと思いました。

【知事】 ありがとうございます。またよろしく願います。

それでは、稲波さん、よろしく願います。

【稲波】 さっきお話のあった鑑賞者が少ないという話はすごくおもしろいなと僕も思って、僕は、スポーツビジネスのお手伝いもさせていただいているんですけど、そこでもよく言われるのは、スポーツと体育は違うという言い方をされるんですね。

スポーツは、もともと語源としては仕事以外のことということを経験というらしいんです。もっと楽しいものだったり、気軽なものだったりするんですけど、日本の体育というのは、どっちかという軍隊の流れを組んでいる、本当に教育の視点でやっている。なので、我々は、運動神経がないと体育を楽しめない、スポーツを楽しめないみたいな発想がどこかにあって、そうすると、じゃ、サッカーを見に行こうとか、野球を見に行こうという気持ちにちょっとならない。

だから、見ることもスポーツの一つなんだということを経験することがすごく大事という話があったんですけど、芸術・文化はまさにそうだと思っていて、スポーツはまだ見たらわかるんですけど、芸術は見てもわからないという、そういう文脈もあったりするので、じゃ、そこをいかにハードルを下げ理解してもらえことをやれるか、ということがすごく大事なんじゃないかなと思うんですね。そうすると、さっき申し上げたみたいに、幼年期から日常的に触れていることでハードルをなくして、別に高尚な芸術を見に行くわけじゃなくて、ただ創作活動なり創造活動を見に行く、そういった形でトリエンナーレに足を運ぶ人たちがもっと増えてきたら、もっともって垣根が下がって、さっき申し上げたように、クリエイティブ能力の高い人たちが社会に出て活躍ができる、そんな土壌が県にできるんじゃないかなと思うんですね。

だから、いかに意識をさせずに芸術に触れさせるかということを経験からうまく促していけると、もう少し違う世の中、というのはちょっと大げさなんですけど、になるんじゃないかなという気はスポーツと体育の話になぞらえて感じました。

【知事】 ありがとうございます。

皆さんに御発言をいただきましたが、さらに御発言があればまた。

【寺田】 今の御発言で、先ほどアートをどう見たらいいんだろうと、わからない方というのをどうしたらいいかと。障害者に対しては、どう接したらいいんだろうというわからない方がやっぱりいて、だから、障害者芸術とかスポーツになると二重の障壁なんですよ。

結局、最初にこの作品、どう見たらいいの、この人たち、どう見たらいいのという。だから、そこにすごく障壁が、ハードルが幾つもあるということ。だから、そういったものを、そのところを除く方法というか、仕掛けというか、何か積極的に皆さんにも考えていただきたいし、私自身もいっぱい考えていきたいなというふうに思っています。

【知事】 いかがでございましょう。

【堀田】 あと、トリエンナーレ自体は、小学生が学校から行きますので、僕は、よく考えると、小学校時代に美術館って行ったっけなと思うと、ほとんど行っていなかったようなイメージがあるんですが、今の子どもたちは、今、3回やっていますので、少なくとも3回は足を運んでいるというのは、すごく大きな変化だというような気はしますね。

やっぱり1回も見えていないと行けないんだけど、子供のときでも見ていると、あれ、何だったっけということでもまた興味が湧くような気はすごくします。

【稲波】 先ほどおっしゃられた二重の知らないというのは本当にそのとおりで、この間、視覚障害者の事故がありましたよね、白杖を持った方がホームに落ちてひかれて亡くなったという事故があったと思うんですけど、その記事が出たときに、視覚障害者の方がお話しされていたのは、点字ブロックがあつて、わからないけど進んでしまうという話もあつたりして、非常に怖いという話があつたんですね。そのときに、一般市民の方の声を聞いたら、やっぱり意識はしているんだけど、声をかけることが逆に失礼に当たるんじゃないかと思つて声をかけられなかったという意見も数多くあつたんです。

これは非常に残念だなと思うのは、やっぱり障害者と健常者の中に明らかにバリアがあつて、そこで声をかけていたらその方はもしかしたら落ちなかったのかもしれないんですけど、声をかけようと思つたけどかけられなかったという、これは非常に、もう一步のところまできているのに、かけられなかったから落ちちゃつたという、そういう現実があるんじゃないかなと思つていて、我々も障害者芸術祭を考えると、その声掛けができる関係性を障害者と健常者で作れる社会になるといいねということを考えて会をやっていたりするんですけど、そういった社会になるためにも、こういった芸術を小さいころからやることでハードルを下げながら接する機会を増やして、うまい世の中にしていきたいなんということを思つたりします。

【知事】 ありがとうございます。

さらにいかがございましょう。

【西川】 先ほど、堀田さんがおっしゃつたことで、障壁を芸術が結構跳び越えさせるものがあるというので、東海大学の小澤教授という、文部科学省の会議にも入つていらっしゃる先生ですが、体育の先生なんですね。日本で一番受けたい体育の授業というのでよく雑誌に載っている先生なんですけど、この人がよく体育の先生の批判をするのは、軍隊的に腕を組んで、だめだ、だめだという体育教師は最低だと。よしよし、おまえら、いいぞ、いいぞ、いいじゃん、いいじゃん、いいじゃん、やろうよ、やろうよというのが、そうい

う先生のほうがいいと。

そして、バスケとかをやっていると、やれる子とやれない子ですごく差ができてしまう。そういうときにその先生はどうするかというと、ボディパーカッションをやるというんですね。ボディパーカッションって、いろんなところをたたくパーカッションのゲームをやると。そうすると、今までバスケがうまかった子たちが必ずしもそれがうまいとは限らないと。みんなでボディパーカッションをやっているうちにどうなるかということ、最終的にはできなかった子たちも体力が上がってきて、もう一回もとに戻すと、みんな、バスケ、うまくなっているという話があって、それも一種のアートセラピーだと思うんですね。パフォーマンスアートのセラピーだと思うんです。

ですから、そういった意味では、どうしても文化ということ、文化という方向性から考えてしまうんですけども、ほかの体育であったり、健康であったり、そういった切り口がむしろあったほうが新しい可能性が生まれてくるのではないかなと思うんですね。

それで、僕は、領域を超えるということってすごく大切だと思っていて、この中で一番領域を超えたのが斉とさんだと思うものですから、自分の意図とはまた別に、「オカザえもん」という作品がキャラクターを超えて日本中に人気が出て飛び火してしまった、そういうものの体験をした中から何か感じたものがあれば、ぜひ教えていただきたいなと思っているんです。

【知事】 いかがですか。

【斉と】 さっき言ったみたいに、僕は、それを出す前は、わからなくてもいいというか、理解されなくてもいいという気持ちで作っていたんですよ、何年も。だから、それが変わってはいないと思うんだけど、うまく言えないんですけど、それが受け入れられたときにどう考えたらいいのかなとか考えたりしましたけど。

あまりうまく言えないですけど、あと、ジャンルを超えるとかよく言うんだけど、そういうのは、僕は結構、そういうことをよく美術の人が言うんだけど、実際は全然超えていなかったりするんですよ。それ、超えていないくせに、ああ、これ、美術だからということによって超えて見せているようにするようなそぶりが僕は嫌だから、それ、全然超えていないよ、というような気持ちではやっています。ちょっと文化の振興と関係ない話になったんですけど。

【西川】 思ってもいない人から何か評価を受けるであるとか、自分がこのような評価を受けないであろうといった評価が作品についてきたわけじゃないですか。それに対して、

もちろん居心地が悪いことなのか、あるいは新たな発見で良いことであったのか、いかがですか。

【斉と】 ちょっと戸惑っていますね、僕は正直言うと。それ、よかったなどは今は思います。すごく。だから、一生懸命やっているし。だって、それが本当に岡崎のためによかったのか、ということはいつも思いますね。

それはもしかして悪いことだったんじゃないかというふうにも思いますね。それだから、すごくちゃんとやらなきゃいけないと思うし、いろいろなことに対して。本当に、これ、よかったことなのか、いや、みんなPRになったからよかったとか、いや、本当にそうなのかなということは絶えず検証していますし、そういう責任が出ちゃったなということに関してはいろいろ考えますし。そういうのはあります。

だから、作ったものと作家の関係というのはどういうことなんだろうとかいうことも絶えずまた考え直したし、あと、作品はパブリックであるということはどういうことなのかと。さっき言ったみたいに、作ってそれでいいやというふうに思っていたんだけど、それが、バーッとたくさん普及した場合に、批評にさらされる範囲というのが自分の想像を超えちゃったんですね。だから、こういう範囲で批評される範囲だと思ったら、全く全然違うし。だから、批判もされたし怒られたし、それはちょっと。

だから、好きでただ作っていますというのと、これは作品ですと発表することは全然意味が違うので。ただ、それを好きで作っていますということに対して、別に批判するつもりもないし、それはそれで、ここをやっていかなきゃいけないし、文化のピラミッドの中の底辺を広げていかなきゃいけないし、ただ、本当にこれが芸術だとかそういうことに関しても、めっちゃめっちゃ考えてやらなきゃいけないし、さっきみたいに100年とか50年とか、そういうスパンで考えないとまずいとは思っています。

【西川】 また作家のメンタリティーと、それから、あと、先ほど言われた鑑賞者のメンタリティーってまたちょっと違うもので、両方ないとやっぱり育っていかないというのがあると思います。

本当に稲波さんがキュレーターという立場をやられて、編集者って、小島さんもそうですけど、編集をするという部分、キュレーションをするという部分、これが結構文化政策では重要なことではないかなと思いますね。

【斉と】 今はメディアがすごく過渡期なので、鑑賞するということは全然もしかして広がっているかもしれないんですよ。ただ、そこでペイするためにお金を落とすかという

ことはまた別の問題になってきているので、またそれも今後いろんな課題になってくるかなと思いますけど。インターネットが発達しているのです、そうすると、どうやって作家は食っていけばいいんだとか、そういうことはいろいろ問題になってくる。

ただ、見てもらいたいという気持ちがあつて、それを見てもらうということのメディアは、すごく過去10年考えられないくらい発達しているんですよ。だから、芝居を見てもらいたいとユーチューブにアップしてもいいんですよ。だけど、それはお金にはならないという、そういうことはこれからいろんな問題になってくるかな。ただ、発信力は誰もが持ち始めた。だから、さっき言ったみたいに、東京中心から愛知に持ってくることもだんだんできてくるし、ということはあると思います。

【知事】 ありがとうございます。

いかがですか。大体よろしいですか。

ありがとうございます。本当に活発に御意見をいただきましてありがとうございます。

文化、芸術、本当にさまざまなジャンルがあつて、どれかということではなくて、とにかくいろんなジャンルでそれぞれ皆さんまた感じていただいて、特に、それぞれの分野で御参加いただき、また鑑賞も含めてそういう和が広がっていけばいいのかなというふうに思います。

やはり人間の営みですから、文化って。人間の営みそのものなので、お祭りもそうですよね、伝統芸能、伝統文化、先ほども家元言われたように、今残っているのは、やはり昔ヒットとして、連綿と受け継がれてきたから今残っているということだと思います。また新たな文化がどんどんどんどんこれからも人類の営みとあわせてできてくるんだろうと思うんですね。

そういうのを考えますと、確かに子供のころ、美術館に行ったかという、なかったでしょう、あまり。今、たくさんできましたもんね、この間に。最近はあれですけど、やっぱり高度経済成長を含めて相当できたし。

うちも、県の芸文センターも、ギャラリーはいつもいつもいっぱいありますけれども、トリエンナーレをやると3か月半か4か月ぐらいこれなので非常に怒られるんですけど、要は使えない、使えないと、どうしてくれるんだと、どこへ行けというんだということなんですけど。それは3年に1回は、それぐらい我慢してちょうだいねと言っておりますけどね。

また、あと、芸文センターのホールのほうもこれから改修に入りますので、来年、再来年と、大ホールもコンサートホールも。あれをやらないと使えなくなるんですね、壊れち

やうので。ですから、そういったことも含めて、メンテとか含めてやりたいと思いますが。

確かに、先ほど斉とさんも言われたように、やっぱり触れる場を作るということは大変大事だと思わせてね。ですから、確かに今、芸術活動をやられる方、本当に増えたというか、多くなっていると思うんですね。発表される方、作品展、だから、市民ギャラリーなんてすごく需要がありますよね。足りない、足りないばかりじゃないでしょうか。

ですから、そういう形で行政は、そういった場をしっかりと作りながら、機会を作っていくということではないかと思います。いろんな意味で多くの方が参加をしていただければと思いますし、障害者芸術も僕は一緒だと思いますよね。できるだけ多くの方に知っていただいて、多くの方にまたサポートも含めて参加していただいて、関心を持っていただくということが必要じゃないかなというふうに思います。

今日、多様な御意見をいただきましてありがとうございました。文化、芸術、やっぱり人間の営み、人間しかできない営みだと思いますから、人を感動させるのは人しかできないということだと思いますので、文化、芸術、スポーツもそうですよね、そういったことも含めて、また愛知から大いにいろんな文化、芸術、発信できればと思いますし、多くの方にまた御参加いただけるように我々もしっかりと取り組んでいければというふうに思っております。

今日は、大変有意義な御意見をいただきましてありがとうございました。これからも愛知の芸術・文化の振興にまた何とぞよろしくお願い申し上げたいと思いますし、今年は、トリエンナーレがちょうどまだやっているところでありますし、またこれから国民文化祭、障害者芸術・文化祭と続いていきますので、よろしく申し上げて、この会を締めさせていただきます。今日はありがとうございました。

— 了 —